

# 第一章 戒祈屋リリエール<sup>かいきや</sup>

空から雨粒が降り注いでいた。

とうの昔に水を吸いつくした服は、レンガ敷きの地面にへばりついて離れない。

わずかに動かすことのできる指先は、微<sup>かす</sup>かに震えながら紙切れを握っていた。もうすっかり濡れそぼってしまっていて、そこに記されている文字を読むことすらできない。

慎<sup>つら</sup>ましやかな家屋が並ぶ路地には、人ひとりの姿すら見えず、閑散<sup>かんさん</sup>としていて、まるで世界から目を背けられてい

るような疎外感を感じた。

僕は道の上、独りぼっちで、死に瀕ひんしていた。

——いったいどこで道を踏み外したのか。

「……………」

とかこんなシリアスっぽい雰ふん囲い気きを微妙に出してるけど  
実際お腹減なかつてて身動き取れないだけだからねマジで。あ  
と雨降つてるとか言っただじじゃん？ これも違うから。実際  
には近所に住んでる飛竜ひりゅうが水浴びしてるせいで飛沫しぶきが撒まき  
散らされてるだけだからマジで。

あと腹減った。

このままだと僕死んじゃう。

……とまあ。

そんな風に瀕死のくせにわりと元気な思考回路を回しているときのことだった。

「——あらっ？」

「ごしゃっ。」

鈍い音が激痛と共に流れたのと同時に、女の声が出た。僕の後頭部に当たった部分がどうやら足蹴あしげにされたらしいと理解できたのは、「あ、ごめんなさい蹴っちゃったわ。大丈夫？」と同じく女の声が上がって投げ下ろされてからだった。

おいおいおい瀕死の子をいたぶ蹴るとかももう万死ばんしに値するよ！

お相手に対するささやかな殺意と、ついでに誠意の籠こも

った謝罪と賠償への期待を込めて見上げると、やや驚いている女性の顔があった。「あ、こいつ生きてたんだ」とか思っただけのような感じにまみれた表情ですらある。なんつー顔してんの蹴っておいて。

僕としばし目を合わせた彼女は、小首をこくりとかしげ、「……何か言ったらどうなの？」と表情を一切変えずのたま宣った。もしかして僕が道に倒れてるのが悪いとか思っただけなのかな？  
しかし。

見れば見るほど不可思議な女性で、さらりと伸びた髪は艶つややかな紅葉もみじのようで、僕を見下ろす瞳ひとみは、吸い込まれそうなほどに深く深く蒼あおい。頭にちよこんと載せられた小さ

なシルクハットの上から覆おおいかぶさるように日傘が差されていて、僕はこのとき、頭上にかかる飛沫しぶきが遮おられていたことに気づいた。

着ている服は喪服に見えた。ドレスのように優雅な黒のロングスカートに、黒いジャケット。袖そで口からは灰色のフリルの袖が覗のぞいていて、見れば日傘を握る手袋すら真っ黒だった。

すべて黒で覆いつくされているにもかかわらず彼女の顔はとてとても白くて、綺麗きれいだった。

「こんな道端みちばたで倒れていたら通行人の迷惑になるわよ。そして現に迷惑してるわ」

僕が口を一切開くことがなかったのは、もしかしたら彼

女に少しだけ見惚みとれていたからなのかもしれない。

「……あ、う……」

うんうん。

じゃなかった。

普通に声を絞ることができなくなっていた。

さつきまで口に放り込まれてきていた水滴のおかげで喉は潤っているはずなのに、声はすっかり枯れていた。

僕は僕が思っている以上に、僕としての限界に近づいていたようだった。

景色は秒ごとに段々とぼやけていって、目の前にあるはずの女性の姿が、窓の向こうのように遠く、隔へだたりがあるようにも見えた。

「……め……し……」

どうにか声を頑張つて絞り出して、それだけ口から吐き出して、僕は力を失った。

指先から、紙切れがはらりと落ちる。

そして僕の視界は、閉ざされた。

「……まったく。とんだお馬鹿<sup>ばか</sup>ね。この子」

そんな冷たい声だけが、やけに鮮明に聞こえた。

そして僕は死んだ。多分。

○

あ、生きてた。

美味おいしそうな香りもしくは僕のお腹のあたりから発生した食事の催促で目を醒さました僕は、そこが見知らぬ場所であることへの疑問よりも先に、僕の服がなぜだか可愛かわいいピ  
ンク柄のパジャマに成り代わっていることへの羞恥しゅうちしん心より  
更に先に、ひいては視線の先でさっきの彼女が手際よく料  
理を作っている光景を目まの当たりにするよりも更に更に先  
に、そんなことをぼんやり考えていた。

……………。

いや、というか何事ぞ？

「起きたみたいね。今ごはんを作っているからしばらく待  
つていて頂戴ちようだい」



振り返らずに、彼女は言った。

「それと、あなたの服、濡れてたから外で干しておいたわ。乾くまでまだ時間がかかるから、しばらくそれで我慢して」

……………。

マジで何事ぞ？

戸惑いながら、僕は起き上がる。

視線を巡らせてみると、どうやらここは彼女の寝室のよう  
うで、古びた木造り床と、真っ白の壁の一室には、必要最低限の家具だけが置かれていた。真昼の太陽は窓から中へ光を伸ばして、柔らかい風が、ベランダに並べられた洗濯物を揺らしていた。

暗緑のスラックス、それと白のシャツ、ブラウンのジャケット、それとキャスケット―僕の服だ。いつもスラックスのポケットに突っ込んでいるはずの懐中時計はそこにはなくて、テーブルの上で静かに時を刻んでいた。

ちらりと時計を覗き込む。

なるほど僕はどうやら二、三時間も眠りこけてしまっていたらしい。

「さつきはすっかり蹴つてごめんなさい。まさか餓死寸前とはね……。ただの酔いどれだと思つて冷たく当たっちゃったわ。ごめんなさい」

淡々と、重ね重ねに謝りながら、彼女は目の前のテーブルにパンやサラダ、それからシチューなどの簡単な料理を

並べる。

それと二人分の取り皿も。

「これは、まあ……私からの謝罪の気持ちよ」

反対側のソファに腰を下ろした彼女はにわかに笑みを浮かべる。

……やだ惚れそう。

「……うううう。ありがとうございます……ありがとうございます……」

「礼を言われる程でもないわ。あと敬語やめて頂戴。あなたと私、さほど歳は離れていないみたいだし」

「え、僕十七歳ですけど」

「じゃあ敬語はやめましよう」

「……………」あ、自分の年齢は言わないんだね。

「どころでござうしてあんなところろで死にかけていたの？」  
彼女は小首をかしげると、「あ、食べていいわよ」とパ  
ンを手に取り、口に放り込んだ。

「えっと、あ、ありがとう……………」僕はサラダを取り皿に移  
して、フォークで口に移しーあ美味うまい！ もうなんかた  
だのサラダだけでも死ぬほど美味しいし食べても食べても手  
が止まらないしもはや永遠に食べていられるような気が  
ーああシチューも美味しい美味すぎて死にそうー！

「うわ……………」

「うわ」

食べながら泣く僕と若干ひきつる彼女だった。

「うええええええ……。美味いよお……。お母さんの味がする……。」

「……そう」

「僕お母さんいないけど」

「反応に困る冗談はやめてくれるかしら」

「これが最後の晩餐ばんさんでも文句ないや……。満足……。うううううううう……。」

「……。」

「あ、それでね、さつき僕が死にかけてた理由なんだけど」

「切り替え早いわね……。」

ごはんを少し食べたらようやくまともな精神状態になれ

たとも言える。死の淵ふちから蘇よみがえったとも言えるかも。

「えっと……どこから話せばいいのか分からないんだけれど……」

僕は、ここに至るまでにあつたことを思い出しながら、スプーンでシチューをすくう。

……美味しい！

「いちいち料理に感動していないでいいからとことと話しながら」

「あ、はい……」

喋しゃべりやねました。

○

「マクミリアくん。今日できみクビね。うん、今まで頑張ってくれてたんだけどさあ、ちよっと人員整理したくなつてね」

「俺、今度バンドマンとして独立することにしたんだよね……だから会社置くことにしたんだ。だからごめん、これでうちの会社は倒産ってことで」

「えー、単刀直入に申し上げますと、わが社は本日で倒産です」

「マクミリアちゃん。君きょうでクビね。お疲れ様」

「きみクビね」「倒産しちゃった」「クビ」「クビ」「倒産」「ク

ビ」「倒産」以下略。

……以下略。

僕は不幸な人生を歩んできたと思う。

十四歳で孤児院を出て以来、今に至るまで送ってきた生活は、あまり充実した日々じゃなかった。

毎日のように働き、少ない給料で頑張る日々。

三か月ほど働くとどういわけか会社が倒産するか、僕自身がクビになる憂き目に遭<sup>あ</sup>つて、また新しい職場を探して、また倒産かクビになる。

僕は長いこと同じ職場にい続けたことがまるでなかった。

「……やってらんない。いらいらする」

そんな毎日ばかりだと嫌気も差すもので、独り立ちして



三年が経った頃には、すっかりやさぐれた僕がいた。

あるいは不安定になりつつあるこの国のありさまが、結果的に僕を苛つかせていたのかもしれない。

『その祈り、本当に必要？ —— 大聖堂での祈りを自粛だいせいどうを自粛じしゆくしましょう。祈りは皆のために』

その日、大聖堂へと続く大通りにはいつものように張り紙が並べられていた。

デザインやキャッチコピーを替えながらも、ずいぶん前からこの道に張り巡らされているらしい注意喚起は、大通りから大聖堂へと向かう人々を脅すように飽きるほどに並べられているわけだけれど、そこを歩く誰もが見て見ぬふ

りをしていた。

この国唯一にして最高峰の遺産である『祈り』は、海に浮かぶこの国の中心部に位置している大聖堂にもたらされた奇跡だった。

大聖堂に行つて、祈りを捧げると、ごく稀まれに、それが叶かなえられる——らしい。

僕は生まれてこのかた一度たりとも祈りを捧げたことなんてないけれど、実際、祈りが叶った人というのは数多くいるらしい。

この国の金持ちの中に祈りが叶っただけの者が何人いよるか。難病を克服した者の中で祈りに縋すがっていた者が何人いよるか。仲睦むつまじい恋人たちの中に祈りを捧げた者が何

人いようか。

祈りとは、成功や栄光、そして克服の条件の一つとなつていた。

だから人々は、何かにつけて祈りを捧げる。夢を叶える便利なものが、国で生きている限り視界の端にちらつくから。

だから、すがりつく。

『建国当初からこの国の中心にそびえ立つ大聖堂は祈りを捧げ続けたせいで今までどおりに機能するのが難しくなりつつあります。どうか皆さん、もう大聖堂で祈りを捧げるのはやめてください。祈りのない生涯をこれからは送ることにしましょう』

先代王女のマリナリーゼが国民に向けて声明を出したのが二十年ほど前であり、祈りを全面的に禁じたのがその頃の話。

反発した市民は暴動を起こし、結局、先代王女は失脚。王位は妹のフィオーネに譲渡された。

そして妹のフィオーネが取った策が、街中に張り巡らされた張り紙だった。現国王はあらゆる事柄に徹底して不干渉を貫く姿勢を取っていた。——強行策を取って立場を失った姉を見ていたからだろう。

けれど何の意味もない。

現に大聖堂には、今日も人々が、種族の枠を超えて大勢集まっていた。

ある魔族たちがいた。「なあ聞いてくれ！ この前こ  
で『可愛い女騎士と巡り合えますように』って祈ったんだ  
わ」「おう。どうなった」「女騎士に殺されかけた」「……………」  
「まあ祈りは叶ったんだけどな……………違う、そうじゃないっ  
て感じだったわ」「……………」

ある人間たちがいた。「億万長者になれますように億万  
長者になれますように」「ねえ見て。あの人また来てる  
…………」「やだわあ。あの人いつもここで祈ってるわよね」「ど  
うせ叶いつこないのに」「とてろろであんたは今日何を祈る  
の？」「え？」「アレックスくんとかじまぐらぐらよひい」「あ？  
先週からあたしアレックスくんと付き合ってたんだけど」「  
はっ？」「ああ？」

ある獣人<sup>じゅうじん</sup>たちがいた。「人間の女の子と付き合いたいんだが」「だが俺たちは毛むくじやらである」「付き合うのは困難と見える」「……………」  
「早く人間になりたい」  
どこからどう見ても俗にまみれた人ばかりが、大聖堂へと連なっていた。

ああもう、こんな願いをする人ばかりで、こんな願いすら叶えてしまおう大聖堂だから、僕は好きになれないのに。

「……………」

だというのに。

けれど僕も、気が付けばその行列の中に紛れ<sup>まぎ</sup>込んでいた。身勝手な人ばかりなのがこの上なく腹立たしいけれど、それ以上に、何一つとして思い通りにならない今の僕に、

腹が立っていたから。

だから僕も、憂さ晴らしに大聖堂で祈りを捧げることにした。

搔い摘んで言うことやってらんなくなっただよね。いろいろと。

あるいは何がなんでも何かにすがりつきたかったとも言える。

そして僕は、行列を進む。

順番が巡ってきたのは、それから一時間ほど待ったあとだった。

大聖堂の中は、すべてが白で埋め尽くされていた。アーチ状になった天井は遥か彼方にあって、見上げればその場

にへたり込んでしまおうほど雄大だった。

歩みを進めるたびに、足音が反響する。大聖堂には一人で入ることが通例となっっていることもあり、ここには僕の足音しか響いてはいなかった。それ以外には何も響かない。俗まみれの外とは完全に隔離された、別世界だった。

大聖堂の一番向こう、赤、青、黄、さまざまな色を散りばめたステンドグラス。その手前にある、名も知らない誰かの像に向けて、僕は片膝を地につけて、両手を握りしめた。

そして。

「もう二度と僕が就職した会社でクビにならないようにしてください！」



と叫んだ。

「もう二度と僕が就職した会社が倒産しないようにしてく  
ださい！」

とも叫んだ。

「ばかやろー！」

あとついでに何かに対して罵倒<sup>ばとう</sup>してすらいた。  
そんな感じで、僕の人生初の祈りは終わった。

「それでどうなったの？」

「叶えられたよ」

「ならどうして行き倒れていたのよ」

「二度と就職できなくなっちゃったからだよ」

○

異変に気づいたのは祈りを捧げてからしばらく経ってからだった。

自慢じゃないけど僕、今までいろいな会社で働いていた経験はあるから、能力面に関しては他より劣っていない自信はあったし、むしろ面接に至ってはもう完璧すぎる腕前だったのね。だから独り立ちして三年経った頃には、どんな会社に志望してもたいい合格はもらえるようになってた。

でも不思議と、祈りを捧げた翌日からは、面接で普通に

落とされるし、働きたくてもそもそもその土俵に立たせてもらえなくなってた。

悔しくなつて、求人募集の掲示板を漁<sup>あさ</sup>って片っ端からいろいろな会社に行つただけけど、どこでも同じように断られた。集団面接で僕以外ダメダメなやつばかりで受け答えもまるでできていないやつたちが合格して、なぜか僕だけ落とされるなんてこともざらにあるくらいに。

それで、仕方なしに今まで貯<sup>たく</sup>めてきた貯金を切り崩しながら生活している中で、僕、気づいちやつたんだよね。これ、多分祈りが叶えられた結果だったんだよ。

「——一度と就職しなければクビになることも倒産することもない、ということね。……随分と厄介<sup>やっかい</sup>な呪いにか

られたものね」

「……呪いね」祈りのことを言っているのだから、なるほど確かに呪いと言ったほうが適切かも。「——それから今に至るまではたぶん語る必要もないことだろうとは思うんだけど、まあ、結局、祈りのせいだと分かっているも、それをどうすることもできないじゃん？ 祈りをなかつたことにしてもらおうように祈ってもみただけだけど、効果はなかつたよね」

捧げられた祈りが叶えられる確率は国民の誰も分からな  
い。僕みたいになつた一度で祈りが叶った者もいれば、何  
年も同じ祈りを捧げて未だ<sup>いま</sup>叶わない人だっている。  
そういう事情から察するに、果たして僕は運がいいのや

ら悪いのやらよく分からない。キレていいかな。

「それで就職したくてもできずに、貯金ばかり切り崩していく日々が続いて、ああいう状態になったということね」  
「うん死にかけた」

祈りを取り消す祈りを捧げながら、就職先を探し歩く毎日だった。掲示板に貼ってある張り紙を端から順に全部片っ端から当たり続けたけれど、結果は変わらなかつた。

そしてついに貯金が底を尽いた。

もはやすぐにでも仕事を見つけないと死に至る未来しか見えなかつた。

「で、今日ね、『リクレス戒祈屋リリエール』っていう、妙な店の面接に行く途中だつたの」

行き倒れていたとき手に持ってた紙切れはその募集用紙ね。「なんかとっつても怪しい感じの店だった。『生きてる人間で奴隷のように働ける人であり、かつ秘密を守れて、余計なことに口を挟はさまない者を望む』って募集要項に書いてあるし。でも給料はそんなに悪くないし。これ絶対何かヤバイ仕事じゃん」

「え、うそ……」

「ん？」 僕変なこと言ったかな？ まあいいや。「まあ……、普通の僕だったら絶対こんな仕事の面接なんて行かないんだけど、あいにく僕の現状はそんなこと気にも留めてもらえなかったからね、行ったの」

「けれどたどり着けなかったみたいね、あの様子だと」

食後のコーヒーに口をつけながら、彼女は言う。  
まるでもってその通り。

「お店に向かう途中でお腹が減りすぎて歩けなくなっちゃってね、倒れたの。そしたら近所の飛竜がちょうどそのタイミングで水浴びを始めちゃってね、快晴なのにびしょ濡れっていうよく分かんない状況に陥おちいっちゃった」

あとはご存じの通り、僕は彼女に救われて、今こうして食後のコーヒーでほっとしている。

かろうじて首の皮一枚つながっていた。

……僕にまつわる不幸な祈りにまつわる現状は何一つとして好転していないのだけけれど。

「なるほど」

彼女はただ一言だけそう応えて、カップをテーブルに置く。「災難だったわね、マクミリア」

「おっといきなり呼び捨てとは」話の中で何度か僕の名前は語ったから今更自己紹介する必要はないかなとは思ってたけど距離感近すぎませんか？

「いいじゃない。私とあなたの仲でしよう？」

「ほんの少しくらい前に逢ったばかりなんだけど」「なんなら初対面で僕蹴られてんだけど。」

「けれど同じ釜の飯は食べたわ」

「……………」

「…………私って人を呼び捨てで呼びたい類たぐひの人間なのよ」

よく分からん理屈だけどそうしたいなら最初からそう言



えばいいじゃんと思いましたハイ。

「まあ——要するに、結果として僕はもう働けない運命になっっちゃったってことかな。これで僕のお話はおしまいい」

僕は大仰に肩をすくめてみせた。

今も大聖堂に人は寄り合い、祈り続けている。

たとえ国から規制されようとも、今を生きている人たちには関係ないのかもしいれない——いや実際僕も今を生きられなくなりそうだったから祈ったんだけどね！

いやはや困った。

これからどうやって生きていこう。お先真っ暗感がすごい。生活保護とかやってくれないかなー。頼むよ領域都市

さん。

「そんなクソみたいな現状に陥っているあなたにいい話があるわ」

「クソで」

彼女は僕を真っすぐに見つめていた。「不幸にも罹<sup>か</sup>つてしまった祈りだとか、重大な不具合を起こしている大聖堂のせいで変な風に罹<sup>か</sup>ってしまった祈りだとか——そういうった呪いとも呼べる類の祈りを解くことができる方法がね、実は一つだけあるの」

「もう一度祈りをかけることじゃしよ？」

しかし彼女は首を振る。

「そうじゃないわ。そんなまどろっこしいことをしなくて

も、呪い自体をなかつたことにできる方法があるのー簡単に言えば、解呪かいくじができるのよ」

解呪とな？

「……どうやって」

「うわ。滅茶苦茶怪訝めちやくちやくげんな顔してる……」

そりゃそうだよご飯恵んでもらっておいでアレだけど、僕こう見えても結構疑り深いんだよね。いきなりそんな提案されても「マジ？ やったぜ！ ああん素敵！」ってなるわけないよね。そこまで僕も馬鹿じゃないんだよね。

「仮に祈りが解けるとして、どうやったらできるの」「けどまあ、聞くだけなら別にいいかなとも思っで、僕は首を傾けていた。」

すると。

「私」と。

……ん？

なんと？

何言ってるのかなーこの人。と思いつつながらぽかーん、と  
している僕に、彼女は、

「私ね、実は罹った祈りを——呪いをなかつたことにす  
る仕事をしているのよ」

と言った。

わりと自信満々な感じぞ。

○

祈りを——呪いをなかつたことにはできる。

その一言は、お先真つ暗な僕にはまさに射しこんだ希望の光のようにも見えて、もうなんか目の前の彼女が女神に見えてさえいて、ついつい反射的に「マジすかじやあ僕の祈り解いてください超お願い！」なんて頼みそうになつたし言葉が喉から出かかたうえに身を乗り出してすらいたけど、すんでのところで耐えきつた。

「……マジで言ってるんすか？」

「敬語」

「……マジで言ってるの？」

「大マジよ。にわかには信じられないだろうけれど、私に

は確かにその力があつて、あなたは呪いのせいで希望のない毎日を過ごしている——まるで巡り合わせね。それとも私たちのどちらかがそのように祈ったのかしら?」

「……………」

そこでふと思ひ至る。

祈りをなかつたことにしてください——僕は確かに、ここ数日間ずっと祈り続けていた。

けれど。

「……本当に祈りをなかつたことのできるの?」

もちろん

「勿論」

「でも、どいぢやって」

聞いたこともない。

彼女は手をかざして見せた。白くて細い指が、こちらに伸びていた。「私があなたに触れる。ただそれだけよ。それだけで、あなたに罹った呪いを一つ、なかつたことになりきるわ」

「……………」思わず目を細める僕だった。

いや、あの……………本当にマジで言ってるの？

「その目は信じてない目ね」

「うーん……………うん。まあ」

「じゃあやってみる？」言いながら彼女は立ち上がり、「モノは試しよ」そしてどいっとうわけか僕の隣に腰を下ろした。

脚と脚が、肩と肩が触れ合いそうなくらい近くで、彼女

は僕を見つめる。

「……なんか近くない？」

「近いほうが話しやすいでしょっ？」

「触りやすいの間違いでは」

「………」

凶星か。分かりやすすぎやしませんかね。

「ま、まあそれは置いて」 実に不自然な挙動で手を横に流す彼女。「で、でっしする？」

「……痛くない？」

「………」

「待ってなんでそこで黙るの！ やめてこっちに手を伸ば

さないで！ やーめーてー！」



「大丈夫大丈夫。たぶん痛くしないから。うふふふふ……」

「うわあああああああっ！」

僕に触れようとする彼女と、その手を必死に押さえる僕。  
なんだこれ。

「最近ちよつと解呪してなくて欲求不満なの。右手がうずくの。やらせて？」

「なにその痛々しい子っぱい理由！ 怖いよ！」

「本当に大丈夫よ。もし痛かったとしてもそれは一瞬で終わるから」

「それ絶対に死ぬやつじゃん！ やだよ！ もうなんか不安しかないよ！」

「ご飯恵んであげたんだからそれくらい我慢しなさいよ」「蹴ったお詫<sup>わ</sup>びって言ったじゃん！」

「残念ながらそれに食後のコーヒ―は含まれていないわ」

「コーヒ―と僕の命を天秤<sup>てんびん</sup>にかけないでくれるかな！」

「あら。あのコーヒ―は最高品種の豆を使っているのだけれど」

「僕の命は最高品種の豆以下ですか……？」

「あれはコピ・ルアクといってね、非常に珍しい豆なの」

「せめて否定してよ！　というかその豆クソじゃん！」  
「いろんな意味でね！」

「飲んだことはなかったけれど僕でも名前くらいは知ってるよ！　どっかのネコからとれたクソから抽出された珍しい」

いってだけのクソ豆コーヒーでしょ何つーもん飲ません  
だ！

「はあ……これだから素人はしろうと。採取方法が少し特殊なこと  
を知っているだけで味も知りもしないくせにありだこーだ  
と文句を言うのはやめたほうがいいわ。そういうのは値段  
と味を知った上でその価値を見出せる者こそが味わうもの  
なのよ」

手に込めた力を緩めたかと思えば、腕を組んでため息を  
漏らす彼女。

申し上げてることとは実質正論だし紛れもなくその通りで、  
まあそれはそうなんだけどクソはクソじゃない？

綺麗なクきれい

ソでもクソはクソじゃない？

つまり僕の命はクソ以下と？　おいおいクソみたいな話じゃな。

「で実際味はどうだった？」

「……………」僕は視線を落とし、テーブルに置かれた二つのカップを見た——二つは既に空だ。「めっちゃ美味しかった」

「でしょう？　コーヒーはどんなものでも飲むまで味は分からないものよ」

「むむむ確かに」唸<sup>うな</sup>る。実際これも間違っていない。

「というわけで私の解呪を受けてみましょう。私の解呪だつてそのコーヒーと同じよ」

つまりは知りもしないのに文句を垂<sup>た</sup>れるなど。

「……むむむ、確かに」また唸る。

というか正気になっってみればこれ以上ないくらいのチャ  
ンスが今舞い降りているのでは。

足蹴にされたと言っても彼女の手料理がなければ僕は今  
頃道端でびしょ濡れになりながら息絶えていたわけで、死  
んでいたようなものなのだから、彼女の要望の一つくらい  
聞かないと恩知らずにも程があるというもの。

しかも、そもそも彼女の言葉が万が一にも真実ならば、  
僕にデメリットはない。

いいことづくめともいえる。

……。

結局僕は考えることを諦めた。

「……乱暴にはしないでよ？」

そして僕は身体を彼女に向けた。僕の言葉を素直に受け取ってくれたのか、彼女はゆっくりと手を伸ばし、僕の頬ほおに触れる。

驚くほどひんやりとした指先が、僕の背中をぞわりとさせた。

「大丈夫よ。すぐ終わるわ」

そして彼女は、指先に力を籠かこめる。

直後だった。

青白いぼんやりとした光が、彼女の指先から滲にじみ、僕にまとわりついた。冷たい指先と、冷たい色合いのわりにその光は春の日差しのように暖かかった。

僕をまんべんなく包み込んだ青白い光は、やがて、ぱちぱちと弾けて、小さな粒になつて消えていく。

泡のように、うたかたのように、彼女の言ったとおりあつという間の出来事だつた。

暖かさは気づけば綺麗さっぱりなくなつていて、彼女の冷たい指先は、名残惜しなごりそうに、僕から離れていく。

「……はい終わり」

そして彼女は何事もなかったかのように向かい側のソファに座る。

なんというか、あまりにもあつけない終わり方だつた。

「……あの、これで本当に祈りはなかったことになつたの？」

「ええ。勿論」

「でもこれじゃあ呪いが解かれたかどうか分からないんだけど」

手から光を出したただけじゃんと言えはそれまでだし。どのような効果がもたらされたのかも、僕には認識できなかつた。

「あら。それなら簡単よ」

けれど彼女は当然のように頷うなずいてから、くしゃくしゃになつた紙切れをポケットから取り出した。

僕が今日行くはずだつた怪しげな店――戒祈屋かいきやリリエールの求人用紙が、そこにはあつた。

「そういえば自己紹介がまだだつたわね」



彼女は言った。

「私の名前はリリエール。戒祈屋<sup>リクレス</sup>リリエールの店主よ」  
そのように語った。

「あなた、うちで働かない？」  
とも。

○

つまり彼女の視点からすれば、こういうことだった。

祈りをなかつたことにすることを<sup>なりわい</sup>生業とする戒祈屋リリ

エールは、近頃の大聖堂の不備で仕事が微妙に増えつつあり、人手不足に悩まされていた。けれど店主のリリエール

はとにかく人心掌握がヘタクソで、求人広告に怪しげなこ  
としか書けなかったせいでまとも面接に来る者もいなか  
った。

その最中、彼女は偶然、僕と出会って、偶然、僕は彼女  
の店に面接に行く途中で行き倒れになっていたと。

つまり僕がいいことづくめであったと同時に、今回の  
顛末てんまつは彼女にとってもいいことづくめであったというわけ  
だった。

まさにういんういんの関係と言えるかな！

まんまと嵌はめられただけでも言えるかな！

「けれどあなたにデメリットがなかったのは事実でしょ  
う？」

「いやでもさリリエールさん……」

「さん付けはやめて頂戴」

「リリエール」

「はい」

「確かにそうかもしんないんだけどなんか納得がいかない  
というか、ちよつと現実に頭が追いつかないというか  
……」

上手うまくいきすぎじゃない？ 命救われた上に僕にまつわ  
る嫌な現状を払拭してもらって、それで就職もできて……  
僕こんな幸せでいいの？ あとで臓器売られることになっ  
たりしない？

「あらいいじゃない。今まで不幸だったぶん幸せになつて

も罰は当たらないわ」

「……………」

「あなたの境遇を聞く限り、あなたは仕事が続きしな  
呪いに罹っていたようだしね」

「ちよつとまっつて何その呪い」

初耳すぎるんだけど。

「あなた以前に誰かに恨みを買ったんじゃないかしら。今、  
この国はご存じの通りろくでもない願いも叶えられるわ。  
そういう風になっっているのよ」

「つまり」

「誰かがあなたの不幸を願った可能性があるってこと」

「……………」

「まあもう解いたからあまり関係はないけれどねーともかく、そういういった事情があつたから、あなたは今まで仕事  
が長続きしなかつたのよ」

けれど、これから先は違つわ。

どんなことがあるうと、あなたが誰から恨みを買おうとも、私があなたを守つてあげる。

と、囁ささやきながら、彼女はテーブルに紙とペンを並べる。

「私の助手になつて頂戴」

優あふしさに溢あふれているわけではなく。かといって含みを蓄えているわけでもない。力強くて、見つめられていれば吸い込まれそうになる深い蒼の瞳は、僕をじつと捉えていて離さない。

僕は今まで、何年か働いてきた中で、いろいろな人を見てきた。

だから知っている。小さい頃に憧れていた大人のように素晴らしくて、大人らしい大人なんて幻想で、世の中にまみれているのは子供の頃から本質的には何ら成長していなくて、自分の利益しか頭にない、よび澱んだ目をした人ばかりだと知っている。

だから祈りは途絶えない。

けれど彼女は祈りを止められる。

そして彼女は僕とは同年代と思えないほど大人びていて——— whichever ころか、この国で出会った誰よりも澄んだ目をしていた。けが 穢れを知らない少女のように。

見惚れてしまえるほどに、綺麗だった。

こんなの、ちゅうちよ躊躇する理由がどこにあったというのか。

だから僕は迷わずペンを取った。



「それじゃあ今後は馬車馬のように死ぬまで働いてもらうことになるから覚悟しなさい。私の店はブラックと呼ぶのが生やさしいくらいにブラックよ」

「はははご冗談を。僕ほんとはリリエールがいい人だって知ってるよ?」

「あら私と数時間前に会ったばかりなのに随分と知った風な□を利くのね」

「やだなあ同じ釜の飯を食べた仲じゃない？」

「それはそうとあなた借金は今後どういった配分で返済していくつもりなのかしら」

「……は？」

借金とな？ なんのことやら。「僕、借金はしない主義なんだけど。今日も借金ゼロのまま死にかけてたわけだし」

「あら。じゃあ解呪料金の千万レインはどうやって払うつもりなのかしら。臓器でも売る？」

「えっ」



「解説してあげるとは言ったけど無料でやってあげると言  
った覚えはないわよ。きつちり働いて返しなさい」

「……………」

「さっきの提案、受けてくれて本当にありがとう。もしあ  
なたが断っていたら今頃大変だったわ。後始末で」

「……………」

彼女はぽん、と僕の肩に手を置いた。

「何はともあれ、ようこそ戒祈屋リリエールに。歓迎する  
わ」

誰よりも澄んだ目をしているとはなんだっただのか。

もしかや僕の目が濁にごっていたのかな？ これ結局つまり僕  
って退路をふさがれた上で進むべき道が一つしかないよう

に錯覚させられただけって感じかな？　おいおいやり口がやくざ者のもんのそれと同等じゃないかーやだー。

「クリーニングオフとか効きますか」

「ごめんなさいうちブラックだからそううのはちよつと」

……………。

やっぱりこれって絶対なんかヤバイ仕事じゃん！　やだ

——！